

📖 今月のおすすめ本 📖

『スヴェンスカ・ヘムの女性たち—スウェーデン「専業主婦の時代」の始まりと終わり』

著者名 太田 美幸
出版者 新評論
出版年 2023
分類番号 367.26/3893/オ



北欧の スウェーデンといえば、福祉が行き届いたジェンダー平等の先進国。女性議員も多い国という印象がありますが、この本の副題にもあるように「専業主婦の時代」があったのです。しかも1930～60年代にかけて、ピーク時には既婚女性の実に9割が専業主婦でした。日本で専業主婦の割合が最も高かったのは1970年代半ばでしたが、それでも6割程度だったのでスウェーデンのそれはかなり極端といえます。それは国の政策により、福祉国家形成期において「国民の家」のスローガンのもとで専業主婦という生き方が奨励され、多くの女性が専業主婦になっていきました。現在の「専業主婦のいない国」と言われるスウェーデンを知る私たちにはかなり意外に思われます。

いまこの国で専業主婦的なライフスタイルへの憧れが増してきて、フェミニズムへのバックラッシュとみなす見方がある一方、家事を積極的に楽しむことをSNSで発信し自己表現するフェミニズムの実践としてとらえる見方があります。このライフスタイルの流行は「専業主婦の時代」からどう影響を受けているのか、またそれを紐解くためにはさらに前の、1905年に結成された女性だけの協同組合「スヴェンスカ・ヘム」（「スウェーデンの家」という意味）についても述べられています。この協同組合は短命でしたが、女性の家事労働と政治参加をつなぐ結節点として抽象的な意味を持っています。こうしたスウェーデン女性の活動の流れが「専業主婦の時代」を生み出し、また変容し、さらにはジェンダー平等のための制度改革を導いたことがよく分かります。1960年代、ジェンダー関係が急激に変化していったスウェーデンには「専業主婦の時代」に構築されたネットワークがうまく作用したといえますが、日本ではその点どうなのか等、確認したり参考になったりする部分もあるかと思います。

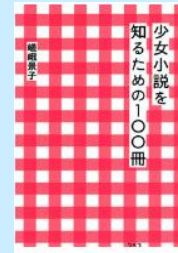
📖 今回の新着にはこんな図書もあります

『国際女性デーの世界史 期限、過去、現在、未来』【367.2/イ】

伊藤 セツ(2023)御茶ノ水書房

『少女小説を知るための100冊』

著者名 嵯峨 景子
出版者 星海社
出版年 2023
分類番号 902.3/サ



この本は明治期の少女小説の登場から戦後の少女小説ブーム、ティーン向け文庫の創刊・隆盛を経て現在のライトノベル・ライト文芸、ウェブ小説に至る、その流れを辿るブックガイドです。草創期、川端康成の『乙女の港』やバーネットの『小公女』、モンゴメリの『赤毛のアン』などの国内外の古典作品から現在の最新作まで100タイトルを選び、作品の読みどころや歴史的な背景が解説されています。各タイトルには「併読のススメ」という、併せて読みたい作品を紹介するコーナーもあり、両者あわせると数百作品を取り上げています。

「少女小説を”少女を主たる読者層と想定して執筆された小説」と定義していますが、現在の少女小説のメイン読者はかつてのような女子中高生でなく20代以上で、最初の定義からズレも生じていて、さらに狭義の少女小説だけでなくウェブ小説や男性向けライトノベルなど隣接領域も適宜紹介し、少女小説の歴史的変遷や多様な世界を紹介されています。

バラエティーに富んだ本の紹介があり、1992年にスタートし少女小説という枠を超えて多数の読者を獲得(一般向けに挿絵なしの文庫版もあり)した小野不由美の『十二国記』、経費を切り口にしたお仕事小説 青木祐子の『これは経費で落ちません! 経理部の森若さん』など、また「自らの手で未来を切り開く少女の立身出世譚」と紹介されている雪乃紗衣の『彩雲国物語』「ポスト彩雲国」といわれる石田リンネ『茉莉花官吏伝』などの紹介を見ていくと、小説のジャンルやレーベルの流れ・勢力図が図式化されたものが見てみたくなる本です。

📖 今回の新着にはこんな図書もあります

『少女小説を知るための100冊』【726.101/シ】嵯峨 景子/著(2023)青土社

『関東大震災がつくった東京—首都直下地震へどう備えるか』

著者名 武村 雅之
出版者 中央公論新社
出版年 2023
分類番号 369.3/夕



関東大震災の地震計での記録といえば、大正12年(1923)当時の東京帝国大学の針が振り切れたものがありますが、この本では平成4年(1992)に発見された針の振り切れていない岐阜測候所(現在の岐阜地方気象台)の観測記録、その発見模様がこの本の最初に述べられています。関東大震災を引き起こした地震を関東地震といいますが、この発見された記録によって震源や揺れの詳細が明らかになりました。11時58分の本震からM7以上の規模の余震が6つもあるその分布図や、関東地震の推定震度分布図などが示されています。また東日本や阪神・淡路、元禄、安政の大地震との被害の比較もされています。

なかでも東京について、なぜ被害の傾向や状況が地域によって違うのか、地域の地盤の歴史や人口密集度、それに伴う建物や町の区画問題について指摘しています。また避難時における当時の習慣や当日の天気、災害の対処拠点となるべき省庁や諸施設も被災したことなどの条件が重なり大震災になってしまったことがうかがえます。

この本ではタイトルにあるように大震災からの復興が、どのように計画され実行していったのか、予算や内容の変更といったことを経てなされた復興都市東京のことが分かるようになっていきます。これを読むと、隅田川に掛かった橋や復興の公園や小学校、その跡地を改めて巡りたくなってきます。大震災からの復興の東京、その後戦争を経た東京ですが戦争復興時はどうだったのか、また現在は、と都市整備と経済活動や町の発展とのせめぎ合い、地下資源を採り出したことの代償など色々と考えさせられます。

☐ 「関東大震災100年—港区を中心に—」の掲示をしています

以下の資料も展示していますのでぜひお手に取ってみてください

『東京都における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構 その2』【369.3/夕】

武村 雅之(2020)東海国立大学機構名古屋大学減災連携研究センター

『関東大震災100年 写真に刻まれた記憶』【369.3/シ】

新聞通信調査会/編(2023)新聞通信調査会

『重ね地図でわかる!日本列島のしくみ見るだけノート』【455.1/カ】

鎌田 浩毅/監修(2019)宝島社

『東京市立小学校児童 震災記念文集—尋常一年の巻~高等科の巻』【369.3/ト】

東京市学務課編纂/編(2022)展望社